

(第3種郵便物認可)

# 白葉枯病増殖を解明 近畿大学 世界で初

近畿大学は、水稲の白葉枯病の原因になる菌が増える仕組みを、世界で初めて解明した。水稲の免疫反応を機能させないたんばく質を、菌が植物体内に分泌して増殖する仕組み。仕組みが明らかになったことで、他の細菌病にも応用できると期待している。

白葉枯病は水で伝染する病気で、梅雨時期の大雨などで水稲が冠水すると発病しやすい。日本で

の発生は少なくなったが、アジア各地でいまだに多発しており、問題となっている。植物は病原菌が侵入すると免疫たんばく質を作って防御する。一方、病原菌は、植物体内で増えやすくなるためのたんばく質を、植物の細胞内に作り、防御反応を妨げる仕組みを持っている。

同大学と日本学術振興会で構成する研究チーム

は、白葉枯病を発病した水稲のたんばく質を分析した。白葉枯病菌が作るたんばく質と、水稲の免疫たんばく質が結合し、免疫応答が妨げられていくことを確認。免疫応答をできなくして、増殖することが分かった。

同大学は白葉枯病菌が作るたんばく質の種類を特定した。今回の発見で、病原菌が感染を拡大するためにはある種のたんばく質が重要な役割を

果たすことが判明。白葉枯病だけでなく、他の細菌病の解決に貢献できると期待している。

## 水稲BL系統 方向性を探る

農研機構がシンボ

農研機構・中央農業総合研究センターは12日、水稲のいもち病抵抗性系統(Blast resistance BL)の現状と方向性をテーマにしたシンポジウムを、茨城県つく